

新「幼稚園教育要領」における領域「環境」に関する研究

— 教材研究のあり方を中心に —

堀 建治

I. はじめに

2017 年 3 月に「幼稚園教育要領」（以下「要領」と略）が改訂された。それに伴い「保育所保育指針」（以下「指針」と略）、さらに「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」（以下「教育・保育要領」と略）も併せて改定がなされた。これはわが国の教育の柱となっている「生きる力」をさらに強力に推進する意味合いが強い。改訂を検討・答申した中央教育審議会（中教審と略）の答申¹⁾（2016 年 12 月）では改訂の経緯が示されている。その要点を示すと、以下のとおりである。すなわち社会に多様性をもたらすグローバル化と急速な情報化や技術革新は我々の生活を質的にも変化させつつある。こうした社会的変化の影響が、身近な生活も含め社会のあらゆる領域に及んでいる中で、子供^{注1}たちの成長を支える教育の在り方も、新たな事態に直面していることは明確である。それゆえ、それぞれの学校において、必要な教育内容をどのように学び、どのような資質・能力を身に付けられるようにするのかを明確にしながら、社会との連携・協働によりその実現を図っていくとの理念を描くことが必要となる。よって教育基本法、学校教育法などを踏まえ、これまでの我が国の学校教育の実践や蓄積を活かし、子どもたちが未来社会を切り拓くための資質・能力を一層確実に育成を期すべきであり、その際、子供たちに求められる資質・能力とは何かを社会と共有しつつ、連携する「社会に開かれた教育課程」が求められており、それゆえに今般の改訂がされたとする。

さて本稿の中心となる領域「環境」について提示されている「要領」はどのような変化がみられるのであろうか。「要領」では幼稚園における生活の全体を通じて総合的に指導するという幼児教育の特質を踏まえ、「ねらい」や「内容」をこれまでどおり「健康」、「人間関係」、「環境」、「言葉」、「表現」の領域別に示している。前回と大きく変更されているところは、今回の学習指導要領改訂の通底をなす主体的・対話的で深い学びの実現に向けて、「幼稚園教育において育みたい資質・能力及び『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』」を提示したことである。

「幼稚園教育において育みたい資質・能力」について「要領」では以下のように示している。

- (1) 豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かたり、できるようになったりする「知識及び技能の基礎」

(2) 気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする「思考力、判断力、表現力等の基礎」

(3) 心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする「学びに向かう力、人間性等」

上記はいわゆる「3本柱」と称されるものであるが、これは幼稚園のみならず、保育所、幼保連携型認定こども園等、わが国の「就学前施設」においてすべからず一体的に育むことが要請されている点も特筆される。

さらに「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として、以下の10の姿が掲げられている。

- | | | |
|------------------|--------------------------|-------------|
| (1) 健康な心と体 | (2) 自立心 | (3) 協同性 |
| (4) 道徳性・規範意識の芽生え | (5) 社会生活との関わり | (6) 思考力の芽生え |
| (7) 自然との関わり・生命尊重 | (8) 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚 | |
| (9) 言葉による伝え合い | (10) 豊かな感性と表現 | |

「10の姿」については「要領」によると、領域の「ねらい」及び「内容」に基づく活動全体を通して資質・能力が育まれている幼児の幼稚園修了時の具体的な姿とされ、教師が指導を行う際に考慮するものとされている。

10の姿のうち、本稿の中心となる領域「環境」とのかかわりが深いものとして(5)～(8)が看取される^{注2}。もちろん領域という概念から、「10の姿」についても他領域とのかかわりから育むものが企図されていることはいうまでもない。しかしながら、先の「3本柱」が示すように、「学び」という観点から「10の姿」をとらえるとき、圧倒的に領域「環境」に対する比重が高まっていることがわかる。

ただし幼稚園教育の基本は遊びであり、遊びは様々な視点から成り立つ総合的な活動であることは忘れてはならないものの、明らかに「3本柱」を意識しての「10の姿」であると思われる。本稿執筆時では「要領解説」²⁾が出されていないため明言は避けるが、「10の姿」が幼稚園修了までに完全に見られなければならないというわけでないとの文言が付されることが予測されるが、今後の展開として「10の姿」を具現化するよう、幼児教育が変容する可能性を秘めていることを忘れてはならない。

やや前置きが長くなったが、本稿の目的は「要領」が示す領域「環境」における「ねらい」や「内容」について、新たに示された「3本柱」と「10の姿」に照射して、今後の領域「環境」における保育の展開について、保育教材研究の視点から考察するものである。今後、子どもに対する資質・能力の育成が企図されるなかで、この点を明確にすることは保育を計画的・組織的にとらえるうえでも重要なこととなるからである。なお、本稿は前述のように現時点で新「要領解説」が提示されていないが、関連事項についてはこれまで改訂までに文科省検討された結果を踏まえて論述する。

Ⅱ．研究の方法

研究方法は文献研究を中心として行う。

Ⅲ．研究の結果及び考察

（１）領域「環境」とは

領域「環境」の前段に「要領」で以下のように示されている。

周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもってかかわり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う。

この文言自体は旧「要領」と同じである。領域「環境」は「周囲の様々な環境」に対し、好奇心や探究心をもってかかわる力と生活に取り入れていこうとする力を養うことをめざすものである。さてここでいう「好奇心」、「探究心」とは何を指すものであろうか。一般的に「好奇心」とは不思議に思うことや知らないことに興味をもつ心、知的活動の根本をなす心を指す。対して「探究心」とは物事に対して新たな知識や深い知識を得ようとし、物事に対して原因を解明しようとすることを意味するものである。

新「要領」他では子どもの主体的な学びを育むことが中心となっているため、「好奇心」あるいは「探究心」は今後、さらに重要なキーワードになる。さて保育における「探究心」として福田は旧「指針」での文言を引用しつつ、①探究心は、多様な経験の積み重なりで養われる、②探究心は、その後の生活や学びの基礎になるという２点を指摘する³⁾。「探究心」は領域「環境」以外にも、前提条件として子どもを支える保育環境^{注3}の構成とのかかわりも認められる。本稿ではその点が論点ではないので、別の機会としたい。

さらに２つの心を基盤として、「生活に取り入れていこうとする力」を養うこととされる。これも前述の新「要領」の柱である主体性を身に付ける、さらに深い学びの姿勢を体得するうえで極めて重要な視点である。ただし、この視点は旧「要領」の「保育のねらい」で示されてきたように子どもの「意欲」や「態度」の育成とも大きく関連している。新「指針」では「心情」、「意欲」、「態度」という「ねらい」は「学びに向かう力、人間性」に集約されている。しかし、子どもの諸能力を育成するためには、旧「要領」での背景が踏襲されることが必須であり、今回の改訂でも温存される形となったのである。

（２）領域「環境」の「ねらい」

「ねらい」は、領域ごとに示されている。ここでいう「ねらい」とは「幼稚園教育において育みたい資質・能力を幼児の生活する姿から捉えたもの」で「幼稚園における生活の全体を通じ、幼児が様々な体験を積み重ねる中で相互に関連をもちながら次第に達成に向かうもの」と明確な位置付けがなされている。つまり、先に示した「３

本柱」や「10の姿」を具体化するために示されたものである。

さて領域「環境」の「ねらい」は以下のように示されている。

- (1) 身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ。
- (2) 身近な環境に自分からかわり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。
- (3) 身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。

そのものは、旧「要領」、「指針」、「教育・保育要領」で示されているものと同じ文言となっており、変更はなされていない。「ねらい」について直接、言及する紙面がないため別の機会に譲るが、ここでひとつ検討しておくことは「身近な」という文言である。「身近な」の意味するところは文字通り「自分の近くにある」ということになる。この場合、「自分の近くにある」とは、園内、あるいは園外であっても園生活とかかわりが深く、子どもの日常生活において存在していることを示す状態と解される³⁾。つまり、「身近な環境」とは子どもの周囲に存在する、園内・外のさまざまなものを意味するのである。「ねらい」では、「身近な環境」や「事象」に対して、親しんだり、自分からかわっていたり、考えたり、扱うことを通じて、子どもが「3本柱」を身に付けていくことが求められるのである。

（3）領域「環境」の「内容」

「要領」における「内容」とは「ねらいを達成するために指導する事項」と前述の「ねらい」同様、明確な位置付けがなされている。具体的には「幼児が環境に関わって展開する具体的な活動を通して総合的に指導されるもの」とされる。「内容」とはつまり、「ねらい」を達成するために教師が指導し、幼児が身に付けていくことが望まれるものと解される。

領域「環境」における「内容」は、新「要領」では1項目（項目(6)）が追加され、全12項目から構成されている。新たに追加された項目以外の「内容」は文言自体も変更がなされておらず、そのままの形で旧「要領」から引き継がれている^{注4}。以下では「内容」を項目別に概観していく。

次に「内容」について、具体的に概観する。

- (1) 自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。

「内容」の第一項目として、自然に触れることが挙げられている。旧「要領解説」では子どもが自然と触れ合う体験をするために園内に自然環境を整備し、地域の自然と触れ合う機会を増やすことが大切との知見が示されている。そもそも自然については都市部においては減少する一方、地方部、特に過疎地域と言われるところほど自然にあふれている。当然のことながら自然が身近に存在する場合は、自然への美しさ、偉大さ、さらにそこから発展し畏敬心など、様々な体験を得られる機会は存在している。他方、都市部では一定の自然環境がみられる公園も様々な形での規制があり、自

由に使用できないという現状もある。園内での自然環境を整備する余力がない、さらにはその周辺にも自然がないという状況をどのように打破していくか、都市部の就学前施設で自然を身近に感じること自体、極めて重要かつ深刻な課題となっている⁴⁾。都市部と地方の「経済格差」ならぬ「保育環境格差」とでもいうべきであろうか。ただし、たとえ身近に自然が存在し、機会はあったとしても、それを保育者が活用していなければ意味がない。保育者はまず子どもの身近にある自然に目を向けていくことが求められる。それがどのような事象を教材として選択し、子どもへの豊かな体験へとつなげていくか、の第一歩となるからである。

(2) 生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ。

触覚、味覚、嗅覚)がある。五感あらゆるものを通じて、我々を様々な世界へと誘ってくれる。五感の獲得を基盤とし、五感をさらに生かして、物の性質や仕組みに迫るという発想はまさに遊びを基本とする保育独特のものである。そこには小学校のような教科書で示されることを抽象的に理解する前段階として、実体験を通じて獲得する基本的要素が含まれている。たとえば「要領解説」では一例として「土の団子作り」が挙げられている。いわゆる泥団子である。近年では泥団子に磨きをかけることが主流となっているが、泥団子は土選びやこね方、核や周辺部に使う土選びにはじまり、こね方や湿り気具合、寝かし、さらに磨きに適する砂の吟味など、あらゆる工程を経て完成する。途中で落下して壊れる、乾燥が進みすぎてひび割れを起こすなど、完成に至るまでは様々な困難を伴う遊びである。そして泥団子をうまくつくる子から情報を得る、あるいは直接教えを乞いながら、それぞれの思いの泥団子をつくり上げる様子はまさに保育の神髄ともいえる。きらりと光るのは泥団子だけでなく、子どもの目が輝く保育教材の研究を保育者はさらに積んでいくことが求められる。

(3) 季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。

春夏秋冬は我が国固有の自然現象である。周囲の自然環境は季節ごとに様々な変化を我々にみせてくれる。春には枝から芽吹き、夏にかけては樹木全体に緑陰が覆い、秋にはそれが色づき、冬に向かうにつれて枯れ落ちていく。園外保育で決まって出かける公園があるならば、こうして公園にある樹木を観察しつづけることで季節の変わりゆくさまを体感することができるのである。さらに生活の変化といえば、入園式は桜の咲く頃、卒園式は桜の芽吹き始めといった園行事と季節のかかわりを子どもに伝えることも大切なことである。さらに暑くなってくれば、長袖から半袖といった衣替えという、我々の服装の様式から季節の移り変わりを意識できるようになる。しかし近年の地球温暖化による異常気象は季節感を消失させる一因ともなり、季節を実感する機会が減少する点は気がかりである。

(4) 自然などの身近な事象に関心を持ち、取り入れて遊ぶ。

本内容は事象に対して関心をもち、取り入れるという点がポイントとなる。旧「要領解説」では、子どもの遊びが興味や関心に基づき、十分に繰り返されるような援助をしつつ、子どもが自然などの身近な事象への関心が高まるようにすることが大切であることを述べている。本稿でも再三、保育者の、子どもの興味・関心が湧くような教材のあり方について指摘するところであるが、そのひとつの回答として保育者自身が事象に興味・関心を抱くことが挙げられる。興味・関心とは活動の源泉となるべきもので、それは「こころ」の動きと連動するものである。保育のねらいは「心情」、「意欲」、「態度」を身に付けることであるが、これは子どもに限った話ではない。保育者自身も同様である。前述の泥団子づくりを例にとると、まず保育者が泥で遊ぶことに對する興味や関心を抱く。泥をこね、まるめることが「楽しい」という「心情」が生まれ、さらに団子が大きくなり、団子が輝いてくるとどうしたら輝きが増すか、遊びを続けたいという「意欲」の気持ち、さらにこの現状は他の場面でも応用が利かないかを考える、つまり「態度」が培われてくる。「心情」、「意欲」、「態度」の発露は他から強制されて喚起されるものではない。主体的な存在となっはじめて起こってくるものである。

(5) 身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。

植物学者牧野富太郎が「雑草という名の草はない。それぞれに名前がある」と有名な言葉を残している。我々が周囲にある雑草ひとつひとつにも「いのち」が宿っている。牧野の金言は我々のつい忘れがちな視点を想起させる力をもつものであるが、子どもも名もない身近な植物、あるいは生き物と接することで様々な感性や物事に対する好奇心や探究心、さらには慈愛のめばえを身に付けている。時として子どもは生き物に対して乱暴な扱いをすることがある。命の大切さ1点で子どもを指導する保育者も見受けられるが、ある意味、昆虫なり、生き物の「いのち」を奪うことを積み重ねていくことで本当の意味での生命の大切さが気付くのではないだろうか。子どもの残虐性のみにこだわるのではなく、長期の視点にたったの指導が重要である。

ところで保育の中で比較的飼育・栽培が可能な動物として、以下のものが挙げられる⁵⁾。

＜動物（紙面の都合上、昆虫類は除く）＞

ウサギ、モルモット、ハムスター、ヤギ、カメ、ニワトリ、アヒル、インコ、カエル、キンギョ、メダカ、フナ、ドジョウ、熱帯魚、カエル、ザリガニ

動物園で見られる動物は子どもにとって身近なものであるか。確かに絵本や紙芝居に登場するライオン、トラ、ゾウ、コアラ、ペンギン等の実物は我々が普段から接するというものではない。大半が動物園でみることができる。子どもが動物に対する興味や関心を抱くのは、絵本や紙芝居、テレビからであり、実物がみられる場として動

物園は子どもにとっては貴重な施設といえる。この点についての詳細は別稿にて論ずる。

(6) 日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ。

本項目は今回の改訂で新たに加わったものである。文化とは、社会を構成する人間によって習慣、共有、伝達される行動様式や生活様式をいうが、地域ごとの、固有かつ独特の生活様式と解釈される⁶⁾。近年では少子高齢化社会が進行し、都市部・地方部にかかわらず伝統行事や祭礼の継承が困難になってきている現状がある。保育現場は、善し悪しは別として地域に根差していかないと保育活動そのものが成り立たないこともあり、様々な形で地域社会との接点をもっている。保育現場と地域社会との連携は特別なことではないことを意識するとともに、地域での活動や諸行事に保育現場が無理なく交流できることが大切である。そのためにも園外での散歩や活動のとき、地域の方々とは話を交わすというコミュニケーションを普段から心がけていきたいものである。

(7) 身近な物を大切にする。

ボードリヤールはかつて消費社会という言葉を用いて、現代社会そのものを鋭く分析しているが、そのなかで消費するために浪費が生まれることを指摘する⁷⁾。確かにモノが大量にあふれる現代にあって、子どもたちに物の大切さを伝えていくことは難しいかもしれない。旧「要領解説」においては保育者自身が物に愛着をもち、大切に取り扱いしている様子を子どもに模範を示すことの大切さを示している。単に行動規範を示すだけでなく、子どもとともに環境保全を主眼として中心とする3R（リサイクル・リユース・リデュース）運動を実践に取り入れている園も多数ある。紙片ひとつを大切に扱うことで無駄を出さない、資源を有効利用する、ひいてはそれが自身の環境を守る行為であることを小さなことではあるが、ひとつひとつ積み重ねていくことでその意識が涵養されるのではないか。

(8) 身近な物や遊具に興味をもって関わり、自分なりに比べたり、関連付けたりしながら考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。

本項目では物や遊具とのかかわりから、比較したり、関連付けたり、試したりして創意工夫する子どもの姿が求められている。子どもは興味をもつと徹底的に遊びの世界へと入り込む。いわゆる「遊び込む」状況に入る。子どもが「遊び込む」ためには子どもが遊びたいと思えるような環境構成が求められる。ここでは物的環境としての遊具が示されているが、「環境構成」の視点からの言質は様々な場面で繰り返されることが多いように思われる。それだけ保育現場が環境構成のあり方や意義、機能を十分に理解していない証左に他ならないものと考えられる。

話は逸れるが近年では特にブランコなどの大型遊具は安全管理の観点から撤去する園が増えてきている。ブランコはあらゆる遊びの要素を含む優良な遊具にもかかわら

ず、「危険」という1点のみで排除されてしまうのはいかなるものであろうか。ブランコを安全に利用できるような環境を整えることが忘れ去られている点が残念でしかない。「危険」であっても、「安全」に扱うことができるような実践知を深めていくことが重要ではないだろうか。

(9) 日常生活の中で数量や図形などに関心をもつ。

本項目では数量や図形などに「関心をもつ」ことが主眼におかれている。今回の「要領」改訂では「3本柱」のうち「知識及び技術の基礎」が加わったことは前述のとおりである。これにより保育現場に与える影響としていわゆる「早期教育」の導入や小学校に向けての「先取り」のさらなる加速が懸念される。つまりそれは数量、図形、後述の文字等について「教え込み」を行う現場が増加するのではというものである。確かにこれまでも知育先行の保育現場においてはドリルやプリントの類のものを取り入れていたり、「文字指導」「数字指導」と「〇〇指導」との名称を冠して、小学校の教科名称を付して行っていたり、あるいは「〇〇（〇内は人名が入る）式教育法」として国語・算数・体育・音楽を総合的に取り入れ、子どもの能力育成を強烈にアピールするところもある。確かにこれらがもたらす結果はわかりやすく、特に子どもを預ける保護者からの理解は得られやすいため、導入する園が増えることは少子化である今日、しかたのないことかもしれない。けれども「要領」、「指針」、「教育・保育要領」が示す各領域の「内容」からの乖離や逸脱は許されるものではない。ましてすべて「遊び」という言葉でひと括りにし、小学校の前教科的指導が罷り通ってしまうところは瞞着以外の何物でもない。確かに保育という営みが決まった教科書や副教材等がないという特性にも起因するが、それは「遊び」が子どもへ与えるものが教科書以上のものをもたらすからである。ひとつの遊びにじっくりと取り組み、自分の世界なりペースを大切にしたいと考える子どもは確実に存在する。さらに活動に追われて、本当に遊びたいという気持ちが押さえ込まれてしまっただけは誰のための「保育内容」なのかを保育者は今ひとつ真剣に問う岐路に立たされているのではないか。

(10) 日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心をもつ。

標識（マーク）や文字は我々の生活の場面で至るところでみることができる。身近なところの標識（マーク）は交通標識、危険標識、服にみられる製品標識、あるいはどの国の人がみても一目で理解できるユニバーサルデザイン、さらには屋外の広告看板も標識として認識することができる。文字については、文字そのものが「記号」であり、標識同様、視覚から認識されることに注目し、環境として文字を扱うが求められる。「文字」を書くことや「文字」を覚えることが主眼ではないことに注意を払う必要がある。さらに教材という視点から領域「言葉」との関連性も考慮する必要がある。

子どもにとって生活に関係ある情報とはどのようなものが考えられるか。それは天気であったり、新しい遊びのやり方であったり、あるいは国際的なスポーツ大会であ

ったり、テレビ番組でのキャラクターのことであったり、多種多様である。ICT 社会が進行するなか、スマートフォンやタブレットから情報を得る子どもも少なくない。そのなかで子どもの興味・関心が特定の事柄に偏ることがないように配慮が求められる。旧「要領解説」では保育者自身が「興味深く見た放送の内容、地域の催しや出来事などの様々な情報の中から幼児の生活に関係の深い情報を適切に選択し、折に触れて提示し」、子どもの興味や関心を引き出していくことを求めている。つまり、このことは保育者の日常生活そのものが「教材研究」であることを示唆する点に留意すべきである。

(11) 生活に関係の深い情報や施設などに興味や関心をもつ。

子どもにとって生活に関係ある施設として、旧「要領解説」では図書館、高齢者福祉施設といった公共施設を挙げている。図書館では使用のしかたであったり、高齢者施設では訪問したりするなど、それぞれ子どもに機会を与えることが豊かな体験を得ることにつながるとしている。子どもにとって身近な公共施設は図書館の他、郵便局や市役所、消防署、警察署等々ある。直接、子どもがこれら施設を利用することはないにせよ、そこで働く人たちの姿を目の当たりにすることで、子どものさらなる成長が期待される。また訪問が難しい場合でも保育現場で関係者が訪問し、話を聞くだけでも子どもにとっては貴重な体験となる。あらゆる地域資源と密接にかかわりをもつことで、これら活動が可能になるのである。

(12) 幼稚園内外の行事において国旗に親しむ。

「国旗に親しむ」ことは重要なことであるにもかかわらず、わが国では親しむ機会に恵まれていない現状がある。実際の活用のあり方を考えたとき、旧「要領解説」では「運動会」が例示されている。確かに「運動会」では就学前施設であれ、小学校であれ、万国旗が吊下げられている。それ自体が国際理解なり、多文化理解につながるものになってはいないし、「運動会」という雰囲気づくりのツールとの認識しかないからである。さらに厳しいことをいえば、旧「指導要領」では自分で国旗を作成するとの事例が挙げられている。確かに自分の子どもが作った「国旗」、あるいはクラスの友達が作ったものはみるかもしれないが、それ以上でもそれ以下でもないと考えられる。

「国旗に親しむ」ことは何も特別の日に限定されるものではないはずである。これは日常生活でも実践可能なことである。たとえば、絵本や事典で国によって様々な色や形、デザインの国旗があることを知ることもあるだろう。さらに変わった国旗をもつ国が地球のどこに位置するかを知りたいという思いから、実際に調べて、知りたいという意欲が生まれることも予測される。子どもの好奇心はとどまるところを知らないが、これも保育室に地球儀なり、国旗絵本（国旗事典）という環境が整備させていることが前提条件となる。環境構成の重要性についてはここで述べるまでもないが、子どもの興味や関心を育むためにはまずもって保育者が「先を見通して」の環境設定

を心掛けることが大切である。保育現場は多文化・多国籍の子どもの利用が増加している現状から、国旗の扱いを含めて、様々な批判もある^{注5}ものの、日本以外にも様々な国があり、そこにはさらにいろいろな人がいることを、さらにはその人たちとの理解を深めることの重要性を子どもに伝えることこそが肝要な点だと思われる。

IV. まとめ

本稿では新「要領」の「ねらい」と「内容」から、保育教材の視点についての検討を行った。特に「知識・技能」の修得面にとらわれることなく、「遊び」を基本として探究心、好奇心を養うことが第一義であることが確認された。さらに領域「環境」のめざす保育教材の視点、あるいは教材観の一端を示唆することができた。今後の課題として、領域「環境」の「内容」で想定される具体的な教材やその展開方法、子どもの発達との関連性からの教材研究のあり方が残される。

注

注1)「子供」という表記には「差別的」表現が含まれているとして、近年では「子ども」ないし「こども」との表記が使用されてきている。しかし文部科学省の見解によれば、「子供」表記そのものに「差別的」「否定的」要素はないとして、2013年から公用文書に「子供」を充てることとなった。今般の改訂学習指導要領ではすべて「子供」という漢字表記がなされている。本稿における「子供」の表記は特段、指示することがなければ文部科学省文書からの引用とし、それ以外は「子ども」の表記とする。

注2)「10の姿」のうち、(5)～(8)について「要領」では以下のように示されている。やや長くなるが、本稿を理解するためにも必須事項であるため、列挙する。

(5) 社会生活との関わり

家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、地域の身近な人と触れ合う中で、人との様々な関わり方に気づき、相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつようになる。また、幼稚園内外の様々な環境に関わる中で、遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき判断したり、情報を伝え合ったり、活用したりするなど、情報を役立てながら活動するようになるとともに、公共の施設を大切に利用するなどして、社会とのつながりなどを意識するようになる。

(6) 思考力の芽生え

身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気づき、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わ

いながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。

(7) 自然との関わり・生命尊重

自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気づき、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切に作る気持ちをもって関わるようになる。

(8) 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる。

注3) ここでいう「保育環境」とは、「保育するための環境」であり、以下の条件を満たすものと考えられる⁸⁾。

- ①自分の居場所として感じられること
- ②遊びたくなる環境であること
- ③試することができる環境であること

上記を満たす場として、およそ以下のようなものを含んでいる。

- ①物的環境…園舎、設備、園庭、遊具、教具、教材など。
- ②人的環境…子ども、保育者、その他の職員、保護者、地域の人々など
- ③自然環境…植物、動物、季節・天候（雨・風・雲・雪など）や自然現象、野原、森林、山、川、海など。
- ④社会的環境…商店、学校、図書館、高齢者施設、郵便局、駅、病院、警察署、消防署、道路、乗り物など。
- ⑤その他…時間・空間・雰囲気など

注4) 「教育・保育要領」は「要領」と同様、1項目((6))が追加された以外の変更はみられない。「指針」においてのみ大幅な変更がみられる。旧「指針」の内容①、内容②は「1歳以上3歳未満児の保育に関するねらい及び内容」に移行しているが、⑦で示されていた「作物を育てる」ことや⑫の「近隣の生活に興味や関心を持ち、保育所内外の行事などに喜んで参加する」は削除されている。代わりに「日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ」(新「指針」項目(6))、「生活に関係の深い情報や施設などに興味や関心をもつ」(新「指針」項目(11))、「保育所内外の行事において国旗に親しむ」(新「指針」項目(12))が新たに「内容」として追加された。これは今般の「指針」改定において「幼児教育を行う施設として共有すべき事項」が盛り込まれたためである。わが国における就学前施設(幼稚園・保育所・幼保連携型認定こども園)での3歳以上児の「教育」にかかわる方向性が

統一化されたことにより、これまでの「指針」ではみられなかった「内容の取扱い」が含まれるなど、「教育」色が前面に押し出された結果と看取される。

注5) 本項目と(6)の項目を合わせて、愛国心の植え付け、さらには国旗・国歌の強制につながるのではないかといった批判が一部にある。しかし1999(平成11)年に「国旗及び国歌に関する法律」が制定された現在、「国旗及び国歌」に対する定義がなされており、本議論そのものは的を射ていないと解する。

引用文献

- 1) 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」2016年12月21日
- 2) 文部科学省『幼稚園教育要領解説』文部科学省、2008、フレーベル館
- 3) 福田奈美恵「乳幼児の探究心を育む保育環境」（『日本教材文化研究財団研究紀要』第45号、2016）
- 4) 大澤力編『実践保育内容シリーズ3 環境』一藝社、2015
- 5) 山内昭道・八並勝正編『領域環境 三訂版』同文書院、2003
- 6) 上中修編『保育実践に生かす保育内容「環境」』保育出版社、2014
- 7) J・ボードリヤール『消費社会の神話と構造』紀伊國屋書店、1995
- 8) 榎沢良彦・入江礼子編『シードブック保育内容 環境』建帛社、2009